

# ネットワーク資料保存 第142号 2026年3月

日本図書館協会  
資料保存委員会

## 川崎市市民ミュージアムにおける紙の応急措置について

佐藤美子  
(川崎市市民ミュージアム)

川崎市市民ミュージアム(以下「市民ミュージアム」)は、令和元年東日本台風で被災した。被害を受けた収蔵品数は、23万点にのぼる。被災して6年が経過し、現在武蔵小杉の旧施設は解体中で、レスキューの作業場を兼ねた事務所を別の場所に移した。市内各所で展覧会やワークショップを行いながら、新しい場所での再開を待っているところである。

まずは、被災に際してのご迷惑をお詫びするとともに、この6年間のご支援に感謝したい。

被災した収蔵品のレスキューには、これまでの震災や洪水などでの文化財レスキューで蓄積された知見を参考にした。しかしながら、市民ミュージアムの場合は、3日間水に浸かったということもさることながら、収蔵庫という構造上高温高湿が保たれ、搬出までの長時間、湿潤状態が維持された。このことが収蔵品に及ぼした影響は大きく、これまでの文化財の被災ではみられなかった特徴である。したがって、試行錯誤しながら行ったこともあり、それが正解だったのか結論はまだ出ていない。本稿では、市

民ミュージアムでの応急処置について、特に紙の収蔵品を中心にご報告するが、あくまで途中経過であることをお断りしておく。

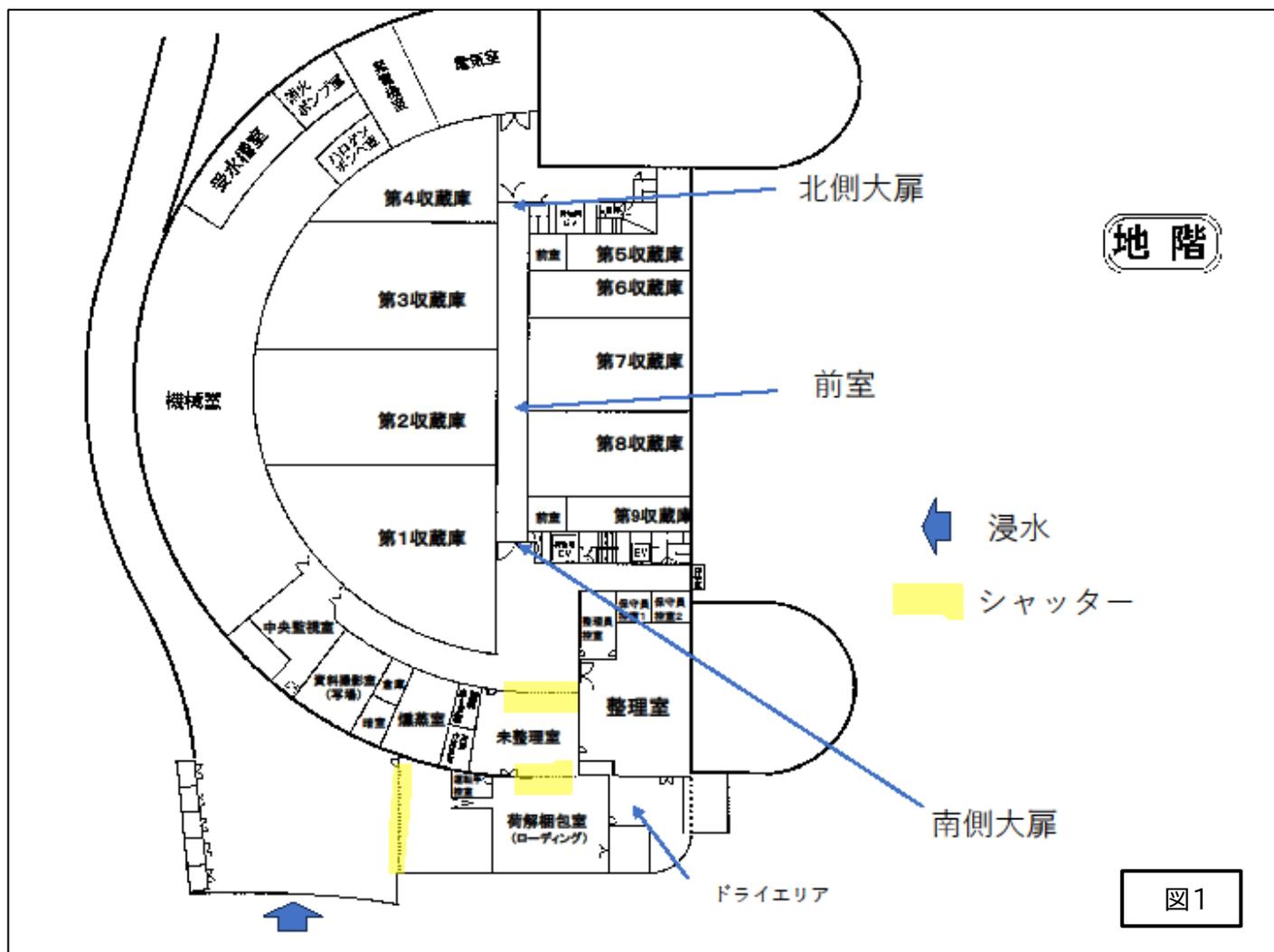
### 1. 市民ミュージアムと被害の概要

市民ミュージアムは、川崎市の歴史に関わる考古、歴史、民俗の博物館と、川崎市ゆかりの美術とまだ「美術」と認知されていなかった漫画や写真、ポスター、さらに映画や映像を収蔵する美術館から成る総合的な文化施設として、多摩川沿いの等々力緑地に1988年に開館した。収蔵庫は地階で、大扉から通路を中央にして、左右に4つと5つの部屋にわかれていた(図1)。収蔵品を素材で分けると、美術作品の油彩画、彫刻や民具の木材、陶器、映画のフィルム、電化製品の金属があるものの、漫画原画、ポスター、写真、古文書、スケッチなど圧倒的に紙が多い。26万点の収蔵品のうち、VHSなどの磁気テープや定温湿を必要としない彫刻、他館に貸し出ししていたミュシャなどを除く23万点が被災したが、その多くは紙であった。

令和元年東日本台風は、10月6日にマリアナ諸島の東海上で発生し、12日に日本に上陸する。静岡、関東、新潟から東北地方に甚大な被害をもたらし、死者100人を超えたという。交通機関は11日夜から計画運休となり、市民ミュージアムは12日を休館として、館には施設と警備担当者がとどま

### CONTENTS

川崎市市民ミュージアムにおける紙の応急措置について	佐藤美子	1
<参加記>映画上映会「映画『疎開した40万冊の図書』」上映会+談話	増田加奈子	7
「疎開した40万冊の図書」上映会 2025.12.22 談話	眞野節雄	9
国立国会図書館第36回保存フォーラム「紙資料の修理・修復の基礎—保存の理念と事例から学ぶ—」に参加して	高橋唯	16
<資料紹介>『水害と博物館』	川原淳子	18
委員会の動き		19



ることになっていた。施設周辺で雨はさほど多くはなかったが、上流付近で降った雨の影響で多摩川の水位は上昇し、本来であれば多摩川に排水されるはずの水が逆流する内水氾濫が起き、市民ミュージアムだけでなく、付近の住宅なども浸水被害を受けている。

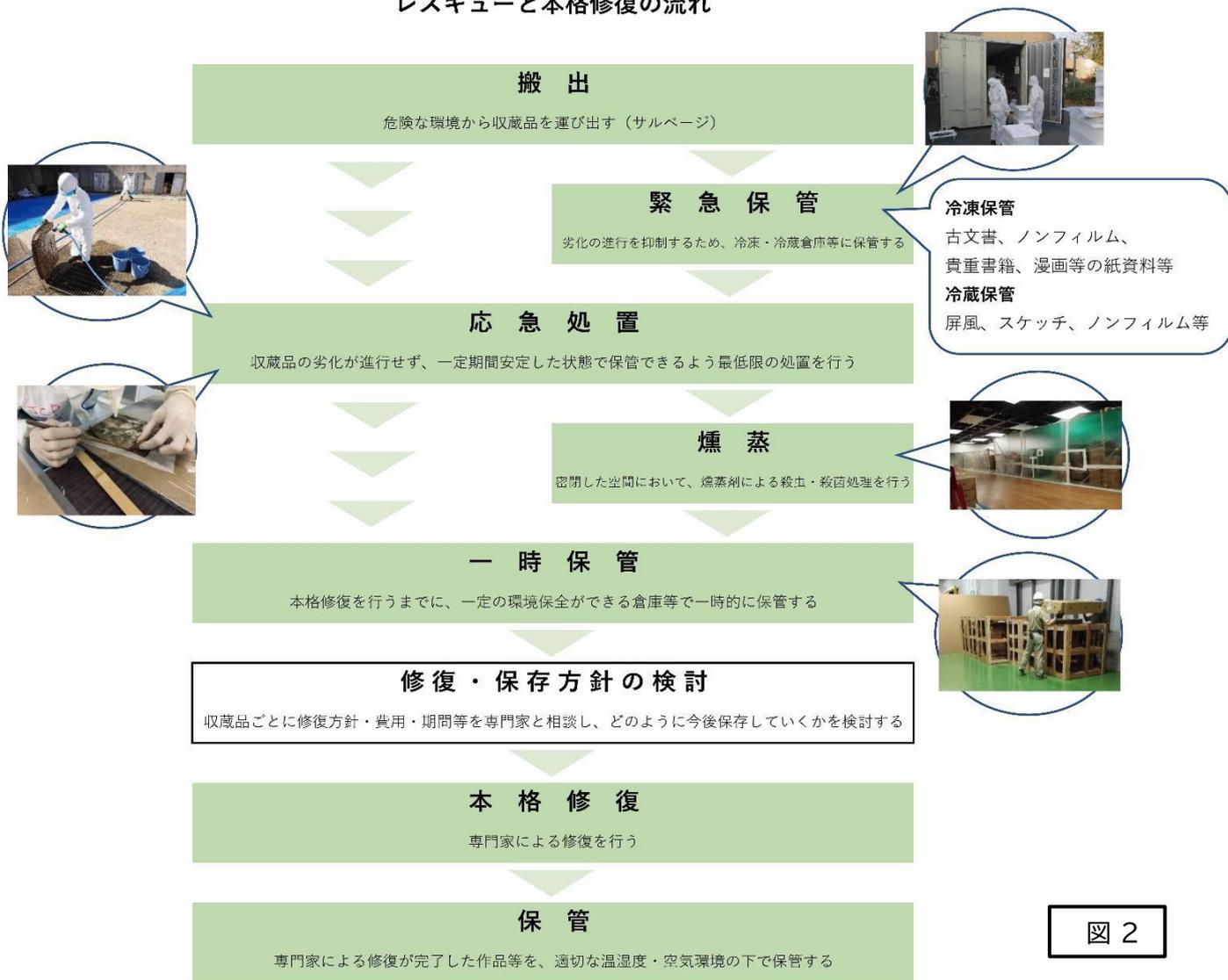
10月12日の午後8時頃に市民ミュージアムの地階に侵入した水は、消防や国土交通省から派遣されたポンプ車で吸い出すのに24時間体制で3日を要した。この作業が完了するまで被害状況を把握できなかったが、14日には文化財防災ネットワーク推進室（現文化財防災センター、以下「推進室」）に連絡した。その後、推進室には「川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキュー」として、資材の提供、助言や指導、専門家の派遣などさまざまなサポートをいただくこととなる。

さて、収蔵庫の水位は、高いところで2mの高さまで達していた。第1収蔵庫（民俗）は、棚にあった

かご類が動かずに残っていたが、床置きしていた資料のほとんどが水流によって移動し、扉付近にまで流されていた。第3収蔵庫（歴史）では、軽量の紙資料が多くを占めており、さらに扉が破損したことも影響して、水に流されて床に散乱したものが多かった。第2収蔵庫（考古）の棚のテンバコ（ポリプロピレン製コンテナ）は満水で、棚から取り出すには、事前に水を抜く必要があった。テンバコがひっくり返って、床に土器片が出てしまったものもある。

第4から第9の美術館収蔵庫では、ラックに掛けて保管していた油彩画の絵の具が剥落し、引き出しの紙作品が膨張して、動かなくなっていた。漫画雑誌を入れたスチール棚は紙の膨張で破裂し、レール式の棚は、水で浮かび上がった後、レールがないところに着地して開閉できなくなっていた。収蔵庫に入るまでも、フローリングの木材が隆起して、扉が開閉できないのはもちろん、歩くことさえ困難であった。

## 川崎市市民ミュージアム被災収蔵品 レスキューと本格修復の流れ



10月16日から推進室と協議を重ね、各地の博物館、美術館の学芸員や専門の技術者などの派遣が決まり、収蔵品の搬出から応急処置までを対象とした「川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキュー」の開始日が11月14日となる。したがって、それまでには出入り口となった南側大扉から一番遠い第4収蔵庫（美術文芸）までの導線を確認して、安全に作業できる環境を作る必要があった。フローリング材を外し、板を張って台車を使えるようにし、散乱した椅子や机を処分して、10月23日には仮設発電機を設置して照明をつけた。この頃から、出入り口に近い第9収蔵庫（映画フィルム）と、第8収蔵庫（写真作品や漫画原画など）から作品の搬出を開始する。

### 2. 応急処置

とにかくいかに早く収蔵庫から収蔵品を出すかが課題である。最初に搬出した映画と写真は、それぞれの専門家や修復家の立ち合いのもと、収蔵庫から出すとすぐに、フィルム現像ラボや大学に持って行って必要な処置を施した。写真については、館内でも処置できるものは洗浄し、乾燥させた。

この「洗浄→乾燥」という工程は、修復の専門家ではない我々ができる最大の処置である。図2をご覧いただきたい。多種多様な分野、素材の収蔵品ではあるが、可能であれば洗浄して乾燥させるまでを「応急処置」とした。応急処置で展示可能な状態になるものもあるが、委託して修復をするものもあり、これ以降は、個々の収蔵品の状態とその後の活用方法で対応が変わる。市民や外部支援団体に進捗を報告する指針として安全に保管できるようにす

るまでを最初のゴールと設定したのである。

例えば濱田庄司の陶器は、水できれいに洗浄すれば展示可能であったし、油彩画は洗浄すると絵の具が剥落するため、洗浄せずに燻蒸、その後は修復を専門家に委託する。処置はまちまちであるが、「応急処置」という通過点を設定することで、全体の進行を把握できるようになった。

しかしながら、当館の収蔵品の多くは先ほど指摘した通り「紙」である。冷凍すると絵の具が剥落する

おそれのあるものは、一枚ずつ剥離して、展示室などの床面に広げて乾燥させたが、それ以外については、ビニールの袋につめて、それをプラスチックの箱に詰めて冷凍した(図3)。工程表の「緊急保管」のことであるが、要は「応急処置」を先送りにしたのである。収蔵庫からの搬出完了直後は、4t の冷凍コンテナ 3 台と 2tコンテナ 1 台のほか、外部の冷凍倉庫も借りるほどの量があった。



図 3



図 4

収蔵庫からの搬出は、2020 年 6 月に完了する。紙を先送りする一方で、民俗や歴史のモノ資料は、収蔵庫から出すと同時に洗浄、館内で乾燥して先に安全な倉庫に搬出することができた。すでに季節は夏を迎え、空調のない館内は暑く、少しでも早く外部に運び出す必要があった。

こうしてモノの搬出がひと段落した 2020 年 7 月、奈良文化財研究所で研修を受け、11 月から外部支援団体とともに本格的に紙の応急処置を開始する。コンテナの数は減少したものの、2026 年 3 月現在も継続しており、今後も数年かかる見通しである。美術館と博物館がそれぞれ週 3 日、交互に作業を実施している。美術作品であれ歴史の古文書であれ、紙の工程は同じである。しかしながら古文書は、そもそもの形状と、保存用の中性紙封筒に折りたたんで封入するという保管方法、さらに水に流されて非常に状態が悪く、固着しているものが多

い。「洗浄→乾燥」という工程前、つまり紙を広げて一枚にするという「解体」の作業が非常に困難で、相当に時間がかかる。図 4 のように、竹べらを使って開披したり、冊状のものを分解したりして、一枚一枚の状態にしてから、洗浄の工程に移るのであるが、洗浄前のこの作業が、現在のレスキュー全体のボトルネックの一つとなっている。

### 3. 処置前の洗浄について

紙の処置工程は、すぐに乾燥させるか、冷凍してから乾燥作業に進むかという2つの工程をご紹介したが、この工程に進む前に洗浄したものについてご報告したい。

ひとつは最初に収蔵庫から搬出した写真作品である。市民ミュージアムはポンプで水をくみ上げる必要があったため、タンクの水がなくなれば断水となる。そこで、被災直後の 10 月末建物の外にテントを張り、施設のある公園の水を運んで洗浄した

(図 5)。対象となったのは、画面のイメージに影響がなかった 19 世紀の写真である。



図 5

しかしながら、本格的にレスキューが始まった 11 月以降は、収蔵庫から大量に運び出されるものの対応に追われ、洗浄をすることができなかった。

それでも一部洗浄したものは、解凍した後の状態が飛躍的ではないにしろ、比較的良好であった。2019 年 12 月 23 日に実施した国立国会図書館、日本図書協会による書籍関連レスキューワークショップでは、図 6 のとおり、洗浄してから冷凍している。



図 6

ただ、これらは収蔵庫からの搬出が比較的早く、加えて被災前の状態が良好であったことなどを考慮すると、残念ながら洗浄の有効性を正確に証明することは非常に難しい。

それから、木製の引き出し内で固着していたポスター類も、乾燥前に洗浄したものがある。第 7 収蔵庫(グラフィック)には、ロートレックや横尾忠則などの主要作品があり、その大半が額装されていた。これらの作品については、まず額から作品本体のみを

取り出して乾燥処置を行う。しかし大型作品が多く、板やマットに固定されているものも少なくなかったため、額から外すのに大工職人を呼んだこともあった。この額の取り外し作業が完了した 2020 年 1 月中旬頃から、引き出しごと入る水槽を設置し、十分に湿潤させてから一枚ずつ剥離する作業を開始する(図 7)。その結果、処置としては額装作品のほうが先に乾燥させたにもかかわらず、水で処置した引き出しの作品の方が、乾燥後の経過が比較的優良なこともあった。この点についても、明確な数値として証明する検証を行っていないが、特に臭気の抑制が認められ、バクテリアなどの菌類の増殖抑制に有効だった可能性がある。



図 7

ところで、こうした状況を踏まえ、NPO 法人カビ相談センターのご協力の下、歴史の古文書について応急処置の工程とカビの量についての調査を行った。<sup>\*1</sup>

歴史の古文書は、収蔵庫から搬出して冷凍コンテナに搬入するまでひと月程度かかったため、冷凍前にカビがすでに発生していた。解凍して乾燥させたものには、黒く汚れのように見えるものから、手で払うと落ちるものまでさまざまなカビが確認できた。目視によるカビの汚染程度で 3 段階、和紙と洋紙をそれぞれ 2 種、乾燥方法では真空凍結乾燥機<sup>\*2</sup>とサーキュレーターによる乾燥の 2 種、洗浄では水洗と炭酸カリウムを用いた洗浄の 2 種でそれぞれカビの量と種類を計測するという調査である。

結論としては、乾燥だけでカビの量はかなり軽減されるものの、水で洗浄すると劇的に汚染度が低

下することが証明された。一方で、カビが内部まで及んでいることがあり、必ずしも目視だけでは汚染度をみきわめることができないこともわかった。

したがって古文書の作業工程を見直すことにした。まず、解凍してから、保存用の中性紙封筒ごとに分離する際(図8)、一度水に浸す工程を設けた。これによって、そのまま乾燥させた資料に付着していたカビが空気中へ飛散するのを防ぐことが可能となった。また、乾燥過程でカビが軽減するとはいえ、真空凍結乾燥機の使用に際しては、機器外部にカビを拡散させ、設置場所を汚染するおそれがある。そこで真空凍結乾燥機に入れる前に資料の洗浄を行い、少なくとも目視によって清浄な状態を確認するようにした。



図 8

この調査では、紙を固着させるツチアオカビのほか、刺激臭を持つアオカビも確認された。カビは収蔵品に与える影響以外に、作業環境を悪化させる。健康被害もあれば、強烈な臭気はモチベーションを低下させる。乾燥や洗浄という工程を経ることでカビの軽減は証明されたものの、解凍してから燻蒸までの作業工程は1年ほどかかることもあり、それまでは作業スペースで保管することになる。定期的な環境調査として、浮遊と付着のカビの量と種類を確認し、除菌と除カビを含めた清掃はいまでも実施している。さらに作業場には消臭器を置いたり、次亜塩素酸水を噴霧したりしている。

一方収蔵品に関しては、東京文化財研究所によ

る臭気の分析をはじめ、奈良県立橿原考古学研究所のご協力により、乾燥剤「シリカゲル」を古文書と袋内に封入し、乾燥と脱臭を同時に促進する方法を現在試行中である。他にも板状に固着してしまったものは、灰汁を使う先行研究\*3を参照しながら、処置方法の検討を進めた。こうした取り組みについては、さまざまな機関にご協力いただきながら、その成果を公表するように努めている。

#### まとめ

被災して6年、武蔵小杉から柿生の事務所に移転して、この10月に3年となる。旧施設は被災した地階の、特に床や天井が木製の収蔵庫は解体できなかったため、常にカビの影響を考慮する必要があった。現事務所には、そうしたカビの発生源がないものの、被災したこと自体が風化していくように感じられることもある。

ただ、本当にたくさんの方々からの支援にどう応えるか、というのが市民ミュージアムに関わる職員の思いであり、なるべく早く、経過報告や課題、調査研究などを公開するようにしている。中でも、水による洗浄については、お知らせしたいことの一つである。

解凍したものの表面にヌルっとした光をみると、水で洗っておけば良かったと思うことはあるが、収蔵庫から運び出した量を鑑みると、市民ミュージアムでは不可能だった。おそらく冷凍するまでに時間がさらに長くなり、すでに脆弱化していた収蔵品に二次的な損傷を引き起こしたかもしれない。いずれ一層の調査研究を進めて、ご報告できるようにしたいと思う。

- 1 谷拓馬, 佐藤美子, 高鳥浩介, 高鳥美奈子, 田中千陽「川崎市市民ミュージアムにおける被災歴史資料のカビ量及び同定検査」『川崎市市民ミュージアム紀要第34集』2022年
- 2 真空凍結乾燥機とはフリーズドライヤーのことで、凍結させたまま水分を気化させることで、固着させずに紙を乾燥させることができる。当館で所有しているものだと、一回に段ボール1箱程度で、3週間かかる。
- 3 富川敦子, 久保憲司「水害被災後の時間の経過により板状に固着した文書の灰汁を利用した修理について」『長崎歴史文化博物館研究紀要』第14号 2020年

<参加記>映画上映会  
「映画『疎開した40万冊の  
図書』上映会+談話」

増田加奈子  
(東京都立中央図書館)

2025年12月22日(月),日本図書館協会  
「映画『疎開した40万冊の図書』上映会+談  
話」が開催されました。

筆者は長年東京都立図書館に勤務しており書籍『疎開した40万冊の図書』は読んでいましたが、恥ずかしながら映画は視聴できていませんでした。「戦後80年」の節目の年に視聴し、さらに元都立中央図書館資料保全専門員である眞野節雄氏のお話も聞くことができ、非常に有意義な時間を過ごしました。



映画は、戦時中の1944年から1945年にかけて、東京都立日比谷図書館が空襲から貴重な資料を守るために奥多摩や埼玉の民家の土蔵を借り、館所蔵の浮世絵等の東京誌料や、民間の重要図書を買って疎開させたことを中心に描かれているドキュメンタリー映画です。

資料疎開の中心人物である館長の中田邦造氏、民間資料の買い上げに関わった反町茂雄氏、疎開先の土蔵の関係者、本の運搬に動員された都立一中(現・日比谷高校)の生徒らの証言が、当時の空襲の映像とともに紹介されます。

映画の後半では、資料保存にまつわる、現代のお話が描かれています。

イラクの図書館で戦火から蔵書を守った図書館員の話(絵本『バスラの図書館員』の題材)、図書館がない福島県飯館村がインターネットで呼びかけ、

多くの絵本が全国から集まった様子、東日本大震災後の陸前高田市立図書館では、壊れた図書館に代わり移動図書館で市民に寄り添う図書館員が印象的に描かれています。

どの場面も図書館や資料を守る思いが描かれており、図書館関係者だけではなく一般の方が見ても、胸に迫るものがあるのではないのでしょうか。飯館村の図書館(絵本のかくれ家、図書コーナー(交流センターふれ愛館内))で、寄贈された絵本を笑顔で読んでいる子供たちの様子は、やはり胸が温まります。

上映後は、眞野節雄氏より、全国の図書館の疎開・被災の状況などについてのお話がありました。

全国の公共図書館の資料疎開の状況については、『近代日本公共図書館年表』を基に情報を追加しまとめてくださっています。ある県立図書館は7月30日までに疎開を完了したものの、8月2日に図書館が全焼してしまいました。一方で、疎開寸前に空襲で焼失してしまった図書館のお話もありました。全国の図書館で日比谷図書館と同じように戦火から資料を守った、あるいは守ろうとしたが果たせなかった図書館員がいたことがわかりました。

それから、映画で紹介されていた陸前高田市立図書館で津波の被害にあった資料を、実は都立中央図書館で眞野氏らが修復をしたというお話がありました。眞野氏は震災直後、何度も陸前高田市立図書館を訪問しており、その時の様子や都立中央図書館での修復の様子については、都立図書館ホームページで映像を公開しています。

「戦後80年」にあたる2025年は、私の周辺でも資料疎開に関する様々な動きがありました。10月には、東京都立図書館OBも会員になっている「東京都教育庁退職者会・教朋会」主催で、疎開先である土蔵(旧多西村、現あきる野市原小宮町)を訪ねる会がありました。残念ながら私は参加できませんでしたが、OBのほか現役の都立図書館職員も多く参加し、土蔵の見学や土蔵を管理している方から貴重なお話を聞くことができたそうです。何より、現役職員の中でも若手職員が多く参加したことは、とてもうれしいことでした。

図書館資料を後世へ引き継いでいく図書館の使命への思いを新たにした上映会でした。

<参考文献>

『疎開した四〇万冊の図書』金高謙二著, 幻戯書房, 2013.8

『近代日本公共図書館年表 1867～2005』奥泉 和久編著 日本図書館協会 2009.9

「岩手県陸前高田市立図書館 被災資料の修復」

[https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/guide/about\\_us/collection\\_conservation/conservation/disaster/rikuzentakada/index.html](https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/guide/about_us/collection_conservation/conservation/disaster/rikuzentakada/index.html)

### 参加者アンケートから

- ・ 戦争と資料保存を考えさせられる大事な時間でした。このような歴史を若い世代に知ってもらうことが重要だと思っています。
- ・ 文化財級の貴重な本が皆の協力で疎開した事。今に続く蔵書となった事。すばらしいことだったと思いました。青梅市でも都内から列車で本を何十箱も運び込み、戦後都立青梅図書館にあったと戦時中に列車から運び出しを手伝った当時小学6年生だった父が言っていました。
- ・ 図書館資料の大切さはよく伝わりました。1本の記録映画としては少し長いと感じる(太平洋戦争に際しての疎開と戦後に疎開本がたどった運命について歴史的事実を知りたかった為)。
- ・ 日比谷の本が疎開したことは一応知っていたが、買い上げのことははじめて知った。あたりまえの日常(今回の場合書籍)が理不尽に奪われる出来事として、戦争と災害が並列されているのに感銘を受けた。戦争を特殊な体験として強調するだけではなく、災害や疫病なども視野に入れて相対化することも、今後の「戦争の伝え方」には必要なのではないか。私が高校に入った年、都立中央図書館が開館した。新しい図書館と比べて日比谷は古ぼけて見えたが、千代田区立になって以来お世話になりつづけている。
- ・ 戦時中の苦勞がわかる内容で大変勉強になりました。祖母が東京大空襲で家を焼け出されていますが、戦時中はもちろん、戦後の生活基盤を立て直すのもとても大変だったと言っていました。
- ・ 本はかなり前に読んでいたのですが、映画はなかなか見る機会がなく今回見る事ができて良かったです。もう一度本の方も読み返そうと思いました。
- ・ 日比谷図書館の本の疎開のみならず、海外の事例も知ることができた。そして、ガザやウクライナの図書館はどうなっているのか、と思いました。本を読む人が増えること、1人ひとりが知性を育てることが、平和をつくるということも再確認できた。早乙女さんは、いつも3/10の朝日新聞の「声」欄でご投稿読んでいたが、初めて動く早乙女さんが見られて感動した(もう亡くなられたので、貴重な映像)。
- ・ 眞野さんのお話がうかがえてよかったです
- ・ 学者から蔵書を買付けた話は、初めて聞きました。柳田国男が沖縄人を案じていた事は流石だと思いました。
- ・ 都立中央図書館の資料を実際に手にとり見たいと思った。特に江戸時代の古地図に興味があるためです(地震対策、防災対策が知りたかったです)。焼失図書がとても気になりました。せめて目録だけでも残っていればよかったですと思いました。とにかく後世に引き継いでいくことが大切と思い直しました。「本」を残すことの大切さです。
- ・ 命がおびやかされている状況下で、本当に図書を大事なものと考えられていたことが伝わってきました。当時何の本かもわからず運んだと話されていた方の笑顔が印象的でした(蝶ネクタイが素敵でした！)
- ・ この映画を見たのは10年ぶりでした。日比谷図書館だけでなく飯館村やイラクの例もとりあげ、本を守ることの意義を問いかける素晴らしい

い映画だと改めて思いました。

- ・ 資料の疎開が全国各地で行われていたことに驚きました。お一人おひとりの仕事に対する高い意識に敬服します。
- ・ 映画は何度か観ているが、観るごとに先達たちの思いや行動力に圧倒される。眞野さんの話もこれまで知らなかったことを知ることができ勉強になった。
- ・ 図書の疎開は図書館の蔵書の疎開だと思っていましたが、買い上げた資料を疎開していたことを初めて知りました。文化を守るという強い使命感に頭が下がります。
- ・ なかなか見る機会を作れなかった映画を見ることができてありがたかったです。

\*参加者：一般 18 名，資料保存委員会委員 5 名（計23名）

「疎開した 40 万冊の図書」上映会  
2025.12.22 談話  
「平和」でなければ、資料も、図書館も守れない

眞野節雄

（元東京都立中央図書館資料保全専門員）

（本稿は、当日の談話を整理・推敲したものです）

眞野です。せっかくですので、少し補足のお話をさせていただきますと思います。

この映画の最後の方に、津波で被災した陸前高田のことがありました。全資料が被災したけど、400冊程度救出されて、再生した、復活した本もあるということを、ちょっと紹介していましたが、あれを再生したのは、この映画のテーマである疎開した都立図書館なんですよ。不思議な縁を感じました。監督さんは、そのことはご存知ないようで、特に触れていませんでしたけども、その陸前高田の被災資料を

修復した当事者である私にとっては、感慨深いものがあります。

私は、ちょっと映画にも出ていましたけども、都立図書館で、専門が和装本の修繕なので、実は日常的に、疎開して生き延びた本たちを修理しているんです。疎開したっていうことは知っていて、それがごく当たり前になっていたのですが、この映画の撮影をきっかけに、自分なりに、ちょっと調べたり、いろいろ興味を持っているとですね、本当にすごい苦労があったんだなっていうことが分かってきて、改めて修理するときに身の引き締まる思いがします。

この映画のなかでは、今の自分たちはそんなエネルギーはないかもしれないっていうことを私は言っていました。この時は、お金のことが特に気になっていました。中田館長と反町さんが、学者さんの家を回って、資料を買い求めるわけですが、お金が必要ですよ。私、500万円の予算がついたって聞いていたんです。それでこういう事業を進めることができたわけです。500万って今の価値でどのくらいちょっと分かりませんが、かなりの高額です。で、あの時代にそんな予算をつけて、昔の人は偉いな、そういうような思いというのが、当時の人にはあったんだなっていうことがあって、今の時代の我々にそういう情熱があるんだろうかということを思ったわけです。

お金、予算のことを少し補足しておけば、実はその500万っていうのはですね、諸説あるらしいんですけど、あの時代、3月10日を迎えたような、大空襲の時代ですから、さすがに資料を買うための予算っていうのはどうもなかったらしいです。ただ、家財を疎開するためということで、1000万の予算がついていたらしいんですよ。ただ、そういう時代ですから、家財の疎開どころじゃない。命カラガラですから、お金が余っていたんですよ。で、資料も家財の一部じゃないかみたいな感じで交渉して、500万円だけなら使っていくということで、どうも予算を確保したらしいんですね。で、実際に終戦までに使ったのは200万円超で、30万冊くらい買い上げたということが、いろいろな記録や証言で言われています。

疎開資料 40万冊と言っていますが、その数字も実は正確にはわからないです。でも、とにかく民

間からの戦時特別買上文庫として買い上げた資料の内、残っているのは 20 万冊ちょっとぐらいですし、そもそも蔵書としてあった「東京誌料」のような貴重資料 4～7 万点は疎開してますので、30 万冊くらいはあったのではないかと。40 万冊いったかどうかは分からないですが、とにかく大量の資料を疎開させたことは確かです。

その日比谷の話はいったん置いておいて、今日の配布資料をご覧ください。日比谷以外の全国状況です。これは私が研究して調べたものではなくて、奥泉和久さんの『近代日本公共図書館年表』という著作から疎開の部分だけ拾い出したものです。ただ、赤字、青字で書いてある部分は、私がいろいろな雑誌とか新聞とかテレビで報道されたのを、たまたま見て付け加えたものです。個人的にたまたまのものしか載せていませんし、また、そもそもの奥泉さんの『近代日本公共図書館年表』も、公共図書館が中心ですので、大学図書館とか専門図書館とかについては、ほとんど載っていない部分の方が多いんじゃないかと思えます。全体からすればこれはそのごく一部であろうことは確実でしょう。しかし、これだけでも、かなりのところで疎開が行われたことが分かります。

この表のように、いついつどこで何冊といった数字や事実関係だけみると、あ、そうなのかっていうぐらいなんですけども、雑誌とかテレビとか新聞とかで紹介されると、その時のエピソードとかも載っていたりするのでリアリティが出てきて。一つ一つが、この時代にどれだけ労力とお金をかけて疎開させたか、その苦労と必死の思いが伝わってきます。まさに命がけだったと。

東京の場合も、映画の中で紹介されていましたが、疎開の場所の確保とか運搬の苦労話というのは関係者が多いので生々しい記録や証言が多く残っています。一方、特別買上げの買い付けの苦労というのは、中田邦造館長と反町茂雄さんが 2 人でやっていたようなものなので、あまり残ってないんですね。また、中田館長は早く亡くなられたので、その肉声は残っていないのですが、反町さんがいくつか著作で振り返っていらっしゃるんですけども、その中に次のようなものがあります。

四月末頃の一日、中田さんと共に山の手方面か

らの帰途の夕方、国電の中、新宿近傍で、前夜の空襲の残火が吹く風にあおられて、また燃え上がったのを見ました。危機感が走りました。吊革につかまりながら、中田さんは「私はこの仕事のために死んでもよい」と、つぶやかれました。とっさの感激に打たれて、すぐに「本当ですね」と応えました。必死というか、文字通り「命をかけて」やっていたことがひしひしと伝わってきます。

そして、疎開はできなかったけれど、例えば新聞のちょっとした記事ですが、次のように報道されたものもあります。「昭和 20 年 3 月 13 日夜から 14 日にかけて大阪の街を襲った第 1 次大阪大空襲。当時、大阪市天王寺区にあった大阪外事専門学校(現・大阪大外国語学部)では、焼夷弾が降りしきるなか、決死の思いで図書館書庫の扉を閉め、迫りくる火の手から蔵書を守った教員がいた。」この人は白井教授という方だったそうですが、扉の前に立ちふさがって全身に火傷を負ったということです。

まあ、あちこちでいろんな決死の覚悟の行動が行われていたということですね。

そして、疎開しなければ、現に助からなかった資料があるという例もたくさんあります。日比谷図書館も、5 月 25 日の大空襲で全焼し、20 万冊の資料を失いました。疎開が間に合わなかったというより、サービスをぎりぎりまで続けようとしたことが裏目に出ました。中田館長は「なんでもっと早く他の本も疎開させなかったのか」と言って、大変悔やんでいたということです。

危機一髪で助かった例としては、例えば富山県立は、7 月 30 日まで疎開をやっている、8 月 2 日に図書館全焼です。それから鳥取県立もそうですね。6 月 7 日から疎開をしていて、7 月 28 日に図書館は焼失しています。それから徳島の県立光慶図書館も、疎開の何日後かに図書館は被災しています。それから表の下の方に載せている高知県立図書館と新潟の長岡市ですが、これは、疎開寸前に、空襲で焼失した例です。

疎開によって、ぎりぎりのところで助かったり、逆に疎開が間に合わず助からなかったことが分かります。沖縄のように全島が壊滅したので、疎開はしたけれどダメだったという悲惨な例もあります。

それから、東京の特別買上げの資料でも、疎開

がギリギリのところまで間に合わなかったものもあります。例えば、井上哲次郎先生の哲学、宗教関係の資料を大量に、今残っているだけでも2万4千冊ぐらいありますが、大量にあるので清掃部のトラックを3台、特別に調達というか、なんとか交渉して用意してもらって、井上先生のご自宅から疎開しようとなりました。その時にちょっと手間取ってしまって、1日では終わらなくて、残りは次の日ということになったわけですが、その日の夜、4月13日の空襲で自宅が焼けてしまったのです。疎開することができなかつた。井上先生のものだけでなく、全体で30万冊買い上げたとも言われているのに、残っているのが20万冊ですから、相当数が疎開前に焼けてしまったのではないのでしょうか。このようにして、疎開を目前にして失われてしまった資料もあるわけです。

もうひとつの資料をご覧ください。これは疎開ではなくて、戦災を受けた図書館の一覧です。これも奥泉さんの本から拾っています。下の欄に番号が打っていない東京と沖縄は、これは私が付け加えたものです。東京の図書館では、日比谷など計28館中、全焼が12館、蔵書73万冊のうち、戦災図書44万冊です。疎開はしたけれど、それは一部で、多くの資料が被災したと考えていいでしょう。そして、これも「疎開」の一覧と同様に全国の図書館のごく一部に過ぎないのです。全国の図書館でどのくらいの資料が戦争で失われたのか。

次に、この映画によってますます有名になりましたが、なぜ、東京の、日比谷図書館の疎開がこれだけ有名になったのかについて考えてみます。

まずは、やはりその規模の大きさということがあると思いますが、次に、図書館史に残るような中田邦造さんという館長とか、後に図書館協会顧問などを歴任された秋岡悟郎さん、この方が疎開の計画から事務方を仕切っていらっしゃいました。そして特別買上事業の買い付けを行った反町茂雄さん、単に古本屋さんではなく、古典籍に非常に造詣が深い書誌学者とも言うべき人です。などなど、多くの著名な人たちが関わっていて、いろいろ語り継ぐというか著作などを残されてきた。それから日比谷図書館自体も、いろいろな座談会とか講演会とか展示会とかをやって語り継いできた。そういうことで、人々の間で記憶に残ってきた、伝えられてきたとい

うことでしょう。戦争でも災害でも「語り継ぐ」ということが、大きな課題になっていますが、やはり歴史書の1ページに記述されるだけでなく、語り継ぐことの大切さということを思います。

それから、最後に、これが他には類をみない大きな特徴だと思いますが、「戦時特別買上」ということで、そのために予算を使って、民間の学者さんたちの蔵書を買って。そもそも図書館の蔵書ではなかったものを疎開させて守ったということでしょう。これは中田館長の発想だと思うんですけども、他の誰にも考えつかなかったかもしれないですね。図書館に所蔵する図書、資料だけじゃない、民間の中でも焼けてしまうっていうのをなんとか救いたいという、図書館の枠を越えて、文化に対するすごい危機感というか、信念があったんだろうというふうに思いますね。そういうことがあって、東京のことが、いろいろな取り上げられて、語り継がれているということだと思います。

秋岡悟郎さんが、ある講演会でお話になったことを、最後に紹介したいと思います。

「疎開した資料は、帰ってきた後、日比谷図書館は焼けていたから、京橋図書館の地下に保管されていました。それが、確か、昭和24年のキティ台風だと思っていますが、キティという可愛い名前ですが恐ろしい台風が東京を襲って、高潮が発生して、地下書庫に流れ込み、資料が海水に浸かってしまいました。中田館長は、涙を流さんばかりにして、塩をかぶった資料を、何度も水で洗ったり、乾かしたりされていたそうですが、結局ダメになった資料もたくさんあったそうです。戦災に続いて、今度は自然災害です。この時にどのくらいの資料がダメになったのかは分かりません。分かっています。疎開した資料の中に水が染みた跡のある資料が結構あるんですが、私は、多分これはこの時にやられたんじゃないかと思ったりします。中田さんは、無念だったでしょう。お金つけてもらって、買い上げて、ここまで生き延びたのに、こんなところで…今だったらね、もう少し、水害からの救出の知見があるから、ひょっとして救えた本もいっぱいあったかもしれないけど、この当時はね、そういうのはないから、とにかく水に濡れてしまったら、もうダメって感じでしたからね。どのくらい資料を失ったかわかりませんが、さぞかし本

当に悲しかったと思います。」

資料保存の「敵」というのは、いろいろありますけども、歴史的に見ると、私は災害がやっぱり一番大きいんじゃないかと思います。災害も人災と自然災害があります。で、戦争は最も大きな人災ですよ。

台風とか津波とか、そういうものは自然災害。自然災害の方は、どうやっても防ぎようがない場合があるんです。ですからいかに減災するかが課題です。ただ、人災の方は防げるんですよ。戦争だったら戦争しなきゃいいんですから。人間の力で防げるんです。完璧に防げるんです。

秋岡さんが講演の最後におっしゃっている言葉です。

「これまで述べてきたことですでお気づきと思いますが、戦火から、戦禍から文化や貴重な文献を守るということは、図書館員だけがいくら一生懸命やってみても、また図書館がどんなに力を入れても結局はダメで、文化財を完全に戦火から守るためには、戦争をやめること以外にはないのではないのでしょうか。」

文化財を守る、資料を守るっていうことも、もちろんそうですけども、図書館そのものが、平和でなければ健全に運営ができないわけですよ。存在できないんです。だから、資料も、図書館自体も、戦争をやったら潰されてしまうんですね。

もちろん、戦争をしないということは、図書館員、

図書館だけではどうしようもないことですが、図書館員の根底にある大きな仕事のひとつに、「平和を守る」ということがあるのではないのでしょうか。そのことを、戦後 80 年の今、改めて強く思います。

私の話はこれでおしまいにします。どうもありがとうございました。

【参考にした主な資料】(順不同)

- ・ 奥泉和久「近代日本公共図書館年表」日本図書館協会 2009
- ・ 反町茂雄「日本の古典籍」八木書店 1984
- ・ 反町茂雄「日比谷図書館の特別買上げ事業」(図書館雑誌 1980.8)
- ・ 秋岡悟郎「戦火から守られた図書」(新文化 1233 号 1977.2.17)
- ・ 「座談会・かくして文化財はまもられた」(ひびや・東京都立日比谷図書館館報・第 5 巻.第 6 号 1962.9)
- ・ 「東京都公立図書館略史 1872-1968」東京都立日比谷図書館 1969
- ・ 金高謙二「疎開した 40 万冊の図書」幻戯書房 2013
- ・ 「東京都立中央図書館 20 周年記念誌」東京都立中央図書館 1994
- ・ 「資料疎開事業 半世紀を超えて」(ひびや・東京都立中央図書館報・第 42 巻 1999.11)

**資料・図書館の戦時資料疎開状況**

奥泉和久「近代日本公共図書館年表」日本図書館協会 2009 による。ただし、赤字は眞野付記。

	都道府県	図書館名	日付	冊数	内容	疎開先		
1		帝国図書館	1943.11.12	66,000	貴重書 その他	県立長野図書館	第 1 次分	1945.3.12 飯山女学校に再疎開  ※61,000 冊(「国立国会図書館月報 232 号, 1980.7」)
			1944.5.11 ※	51,000	特別和漢書	県立長野図書館	第 2 次分	
				3,000	学位論文	県立長野図書館		
			1944.8.22	3,400	特殊文庫・重要図書・帝国学士院その他の依頼本・洋書の稀書など	県立長野図書館	第 3 次分	

			1945.8.15-29	82,000	(占領軍の接収を避けるため)	山形県西村山郡(個人宅)	第4次分	「国立国会図書館月報」699/700号, 2019.7 これによると, 他にも帝室博物館(現東京国立博物館)に91,000冊, 神奈川県高都屋村(現伊勢原市)に約2万冊など, 合計30万冊超疎開したとある。
2		東京帝国大学	1944.3.7		法文学部の貴重書	成田図書館	第1次分	1945.8.6 福島県に再疎開
			1944.9.30		法文学部の貴重書	成田図書館	第2次分	
			1944.7.1-1945.8.1		法学部研究所図書館蔵書	(千葉)興風会図書館		
			1944.8.10	木箱 308箱	附属図書館図書	山梨県	第1次	1945.10 戻る
			1945.6.10	木箱 50箱	附属図書館図書	山梨県	第2次	1945.10 戻る
3	青森	弘前図書館	1945.8.9		郷土資料	疎開		
4	秋田	県立	1945.6.27		貴重図書	南秋田郡豊川村		
5	岩手	県立	1945.7.20		貴重図書	疎開		
6	宮城	県立	1945.4-		蔵書		数回	貴重書 9,523(「青柳文庫」「養賢堂文庫」「今泉笹洲文庫」) (「みんなの図書館」2015.9月号)
7	山形	県立	1945.7.20		蔵書	東沢村蓬菜寺		
8	東京	都立日比谷図書館※	1945.3-(戦時特別買上文庫)「東京史料」などは1944.1.29~	(40万冊)		(多摩・埼玉地域)		1944.1.29 一部が疎開(第1弾) 200万円の予算で民間重要図書の買上, 疎開開始(敗戦まで) 1945.5.25 図書館焼失 ※詳細は「疎開した四〇万冊の図書」金高謙二, 幻戯書房, 2013
9	茨城	水戸市立図書館	1945.7.12	15,000	図書	疎開		「国立国会図書館月報」699/700号, 2019.7
	群馬	前橋市立図書館	1945.3		重要図書			
10	山梨	県立	1945		一部図書	北巨摩郡下の神社		
11	静岡	県立「葵文庫」	1945.3-		貴重図書	市外(*7か所)		*6.20空襲。文庫書庫は無事。(※は静岡新聞2015.6.19,20による)
		「沼津文庫」						6.20空襲。蔵書は疎開して無事。(静岡新聞2015.6.20による)
12	長野	県立	1945.7.13		蔵書	疎開開始(浅川村)		
13	愛知	豊橋市立図書館	1945.3.9		漢籍のうち重要なもの	公益質屋倉庫		
			1945.8.4		貴重図書	愛郷国民学校		

15	岐阜	県立	1945.6.10-30	15,000	郷土資料など	市内の寺院		
16	新潟	県立	1945.4-		貴重図書	分散疎開		
17	石川	金沢市立図書館	1945.4-休館		藩政期の貴重資料	小学校		※毎日新聞 20230815
18	富山	県立	1945.3.27-7.30	65,000	蔵書	疎開		9次にわたり65,742。他に戦時疎開寄贈「志田文庫」3,140,「前田文庫」437。(「みんなの図書館」2015.9月号) ※毎日新聞 20230815 1945.8.2 図書館焼失
19	福井	福井市立図書館	1945.7.13-7.15		蔵書	花月国民学校		※毎日新聞 20230815
20	大阪	府立	1945.3.29		貴重図書	疎開開始		
21	奈良	県立	1945.3.27		貴重図書	疎開開始		
22	和歌山	県立	1945.7.16		郷土資料	那賀郡真国村		
23	三重	県立	1945.7.1-15		貴重書, 郷土資料など	疎開		1945.7.28 図書館焼失
24	鳥取	県立	1945.6.7		蔵書	疎開開始		
25	島根	松江市図書館			重要資料	近郊の小学校など		他, 図書館自体が疎開。資料も疎開。(1945.7.20-27)(島根県教育委員会「教育広報」1968.10上,「島根県立松江図書館誕生日誌」野津無字著 1946)
26	岡山	岡山市立図書館		約300冊	貴重図書	郊外の恩徳寺		1945.6.29の空襲で残り約7万冊の蔵書のほとんどが焼失。(「みんなの図書館」2024.8)
27	広島	市立浅野図書館						1945.8.6「疎開中の貴重書を残し全焼」の記述あり
28	山口	県立	1945.6.22		貴重図書	疎開		
29	香川	県立		4,800-7,000?		高松市内神社など4か所		2015.7頃のNHKニュース
30	徳島	県立光慶図書館	1945.6.27		阿波国文庫中稀観本	疎開		1945.7.4 図書館被災
31	佐賀	県立	1945.8		貴重図書の一部	疎開		
32	宮崎	県立	1945.4-		蔵書	疎開		
33	鹿児島	県立	1945.6.17		重要書類等	伊敷の青年師範の防空壕		
34	沖縄	県立	1945		古文書などの郷土資料	羽地村の大湿帯の予定でとりあえず近隣の数か所に。空襲により灰塵に帰す。		沖縄戦のため散逸。図書館は壊滅。(「みんなの図書館」2024.8)

35	東洋文庫	1945.6.27-	25万冊?	蔵書	宮城県		貨車 14 両, 5,300 梱包 (「みんなの図書館」2015.9 月号)
36	京都帝国大学	1944.6.11	1,390	貴重書	嵯峨大覚寺	第 1 次	「京都大学附属図書館六十年史」昭 36.3
			4,167		保津村土蔵		
		1945.7.20-8.14	311,672		府下小学校等	第 2 次	
37	日本点字図書館	1944 2,300 冊を茨城に疎開。1945 3,000 冊に増えた図書を、さらに創始者・本間一夫の実家・北海道増毛に。(「疎開した四〇万冊の図書」)					

他、映画パンフレット「疎開した 40 万冊の図書」によると、次のところで疎開寸前に空襲で焼失とのこと。

高知	県立	1945.7.4	13 万冊
新潟	長岡市立	1945.8.1	互尊文庫罹災壊滅

### 資料・図書館の戦時被災状況

奥泉和久「近代日本公共図書館年表」日本図書館協会 2009 による。ただし、赤字は真野付記。

1	1945 3/9.10	東京	東京大空襲で都立両国, 浅草, 本所, 東駒形, 西巢鴨各図書館焼失。深川も被災。
2	3/13.14	大阪	大阪大空襲で大阪市立育英, 今宮, 阿波座, 御蔵跡各図書館館舎焼失。
3	3/17	兵庫	神戸市立図書館, 戦災被爆。
4	3/19	愛知	市立名古屋図書館, 戦災のため焼失。
5	4/1	東京	四谷図書館, 被災。
6	4/14	東京	西巢鴨図書館, 被災。
7	4/15	神奈川	川崎市空襲により川崎市立図書館, 私立大師図書館が焼失。
8	5/25.26	東京	日比谷, 麴町, 三田, 中野, 寺島, 渋谷各図書館全焼。これにより区内 28 中 11 館が被災。
9	6/18	静岡	浜松市立図書館, 建物と 3 万 5 千冊の蔵書を焼失。
10	6/18	三重	四日市市立図書館, 空襲により旧館舎と 1 万 7 千冊の蔵書を焼失。
11	6/19	福岡	福岡県立図書館, 福岡市空襲で蔵書とともに全焼。
12	6/29	岡山	岡山市空襲により, 岡山県立図書館(16 万冊の蔵書), 岡山図書館(7 千冊の蔵書)焼失。
13	6/29	福岡	門司市立図書館, 空襲により焼失。
14	7/1	山口	宇部市立図書館が被爆して, 建物・蔵書の一切を焼失。
15	7/2	熊本	県立熊本図書館, 熊本大空襲により建物全焼, 蔵書 8 万 3 千冊焼失。
16	7/3	兵庫	姫路図書館, 戦災により全焼。
17	7/4	徳島	県立光慶図書館, 空襲により被災。
18	7/4	香川	県立図書館, 高松空襲で約 9 万冊の蔵書と表誠館を焼失。
19	7/4	高知	県立図書館, 戦災により焼失。疎開寸前の蔵書 13 万冊も廃塵に帰す。
20	7/6	山梨	市立甲府図書館, 空襲で被災。
21	7/7	静岡	清水市立図書館, 空襲で全館全蔵書焼失。
22	7/9.10	宮城	仙台空襲により宮城県図書館本舎および書庫, 附属建物等, 蔵書とともに焼失。
23	7/9	岐阜	県立岐阜図書館, 空襲により館舎, 資料ともに焼失。
24	7/9	和歌山	和歌山県立図書館, 和歌山市空襲により貸出文庫用図書 7 千冊焼失。

25	7/16	大分	県立大分図書館、空襲により全館焼失。
26	7/17	静岡	「沼津文庫」空襲により被災。ただし蔵書は疎開し無事。(静岡新聞 2015.6.20)
27	7/19	福井	市立福井図書館、空襲により焼失。
28	7/20	愛知	岡崎市立図書館、戦災のため焼失。
29	7/26	大阪	堺市立図書館、堺大空襲により書庫を除いて全館焼失。田島清館長は10日間書庫の防護壁を外さず資料焼失を免れる。
30	7/26	山口	徳山市が被爆し、児玉文庫は一切を焼失。
31	7/28	青森	県立図書館、青森空襲で書庫を残し焼失。
32	7/28	愛知	一宮市立図書館、戦災のため焼失。
33	7/28	三重	県立図書館、空襲により館舎と1万9千冊の蔵書を焼失。
34	7/—	愛媛	市立伊達図書館、被災全焼。
35	8/1	新潟	長岡市空襲、互尊文庫罹災壊滅。
36	8/2	茨城	水戸市空襲により、茨城県立図書館、水戸市立図書館の館舎・蔵書等焼失。
37	8/2	東京	八王子市立図書館、戦災により全焼。
38	8/2	富山	富山市空襲により、富山県立図書館館舎全焼、蔵書3万5千冊を焼失。
39	8/6	広島	原爆により広島市壊滅。広島市立浅野図書館、疎開中の貴重資料を残し全焼。職員15名のうち4名死亡。
40	8/8	福岡	八幡製鉄所図書館、空襲で焼失。
41	8/9	長崎	原爆投下。県立長崎図書館、本館庁舎罹災。
42	8/13	鹿児島	阿久根市立図書館、空襲により全焼。
43	8/14	群馬	伊勢崎市立図書館、空襲により館舎・蔵書を焼失。ただし3階建ての書庫は無事。8.20に書庫の扉を開く。庫内図書は無事を確認。
		東京	戦争による都立図書館の被害、日比谷など計28館、蔵書73万冊のうち、全焼12館、戦災図書44万冊。
		沖縄	数度の空襲で沖縄の図書館が壊滅。沖縄県立沖縄図書館、古文書などの郷土資料を羽地村の大湿帯に疎開したが戦争で散逸。

国立国会図書館  
第36回保存フォーラム  
「紙資料の修理・修復の基礎  
-保存の理念と事例から学ぶ-」  
に参加して

たかはし ゆい  
高橋 唯（東京都立中央図書館）

はじめに

令和7年12月4日、国立国会図書館東京本館において開催された「第36回保存フォーラム」に参加した。本フォーラムは、資料保存・修復に関心を持つ者を対象に、その時々に関心を集めるテーマや実践例について、専門家からの意見聴取や実

務担当者間の意見交換を行うことを目的として開催されているものである。今回は現地での対面開催に加え、当日の様子を収録した動画が国立国会図書館公式 YouTube チャンネルで公開されるなど、参加形態の多様化が図られていた。

私はこれまで、資料保全・保存に直接関わる業務に携わる機会が少なく、資料保存に関する知識も、司書課程で学んだ基礎的事項や、採用初年度に受講した館内研修の内容にとどまっていた。そのため、資料保存についての理解は断片的であり、実務と結び付いたものとは言い難い状況であった。

しかし、今年度、私が資料保全に関する事務分掌を担当することとなり、資料保存に対する理解の必要性を強く認識するようになった。私が勤務する東京都立中央図書館には、資料の保全・修理・製

本を専門に行う「資料保全室」が設置されており、図書館資料を長期的に利用可能な状態で維持するための中核的な役割を担っている。私自身が担当した業務は、資料保全研修の開催準備や契約手続きといった主に事務的な内容であったが、業務を通じて、資料保全の考え方や理念を理解していなければ、関係部署との調整や判断を適切に行うことができないと感じる場面が多々あった。

今回の保存フォーラムのテーマは、「紙資料の修理・修復の基礎—保存の理念と事例から学ぶ—」であり、紙資料の劣化要因や保存修復の考え方、さらに各機関における具体的な修復事例について体系的に学ぶとともに、実務に即した知見を得ることができる貴重な機会であった。

## 2. 基調講演

はじめに行われた基調報告では、「近現代紙資料の保存と修復」をテーマに、金山正子氏(元・元興寺文化財研究所研究員)による講演が行われた。講演では、保存修復における基本理念として、「原形保存の原則」「可逆性の原則」「安全性の原則」「記録の原則」という四つの原則が示され、これらを軸に話が進められた。

特に印象に残ったのは、「現状を尊重し、必要最小限の介入にとどめること」という考え方である。資料はそれ自体が歴史的情報を内包しており、損傷や経年変化も含めて資料の一部であるという認識が示された。また、修復の際には、将来的に元の状態へ戻すことが可能な可逆性の高い材料や技法を用いること、さらに、どのような判断のもとで修復を行ったのかを記録として残すことの重要性についても、具体例を交えながら説明がなされた。

講演後半では、近現代の紙資料が直面している酸性劣化や、利用に伴う破損といった問題点が整理され、それらに対してこれまで用いられてきた修復技法が紹介された。保存修復は単なる技術的作業ではなく、資料の価値を長期的な視点で守り続けるための判断と実践の積み重ねであることを、改めて認識する内容であった。

## 3. 事例報告

続いて行われた事例報告の一つ目では、阿久津智広氏(国立公文書館業務課課長補佐〔保存担当〕)より、「国立公文書館における資料の修復」に

ついて報告があった。国立公文書館では、公文書という性質上、膨大な量の紙資料を長期間にわたり保存していく必要があり、すべての資料に同一水準の修復を施すことは困難である。そのため、資料の損傷状況や利用頻度、重要度などを踏まえ、修復の優先順位を判断している点が紹介された。大量資料を扱う機関ならではの工夫や課題について知ることができ、同じく公共機関で資料保存に携わる立場として、非常に参考となる報告であった。

二つ目の事例報告では、「国立国会図書館における紙資料の修理・修復—和装本保存係の業務を中心に—」をテーマに、正保五月氏(国立国会図書館収集書誌部資料保存課和装本保存係長)より報告があった。和装本という一般的な洋装本とは異なる装丁形態を持つ資料を対象に、実際の修理・修復業務の流れが具体的に紹介され、原資料の構造を正確に理解したうえで作業を行うことの重要性が強調された。修理に使用する材料や技法の選択理由についても丁寧な説明があり、資料の来歴や将来的な利用を見据えた判断が不可欠であることが示された。

## 4. おわりに

各報告の後には、参加者同士による意見交換および質疑応答の時間が設けられた。他館における保存修復体制や、現場で直面している課題について意見を交わすことで、自館の状況を客観的に見直す機会となった。館種や規模によって条件は異なるものの、「限られた資源の中で、いかに資料を保存し、次世代に継承していくか」という共通の課題意識を共有できたことは、大きな収穫であった。

今回の保存フォーラムを通じて、紙資料の修理・修復は専門部署のみが担う業務ではなく、日常的に資料を取り扱うすべての職員が保存の基本理念を理解しておくことが重要であると強く感じた。資料の取り扱い一つ一つが、将来的な修復の可否や資料寿命に影響を及ぼす可能性がある。

本研修で得られた知見を、今後の資料保全関連業務や関係部署との連携に生かし、資料保存に対する理解をより一層深めていきたい。本保存フォーラムは、資料保全の基礎から実践までを学ぶことができる、非常に有意義な研修であった。

## 『水害と博物館—川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキューの記録—』



- 発行：求龍堂
- 出版年：2025.5
- 編著／川崎市市民ミュージアム, 安尾祥子, 林花音, 奈良本真紀
- 頁数：144 頁
- 【目次】
  - 第一章 被災の概要
  - 第二章 レスキュー活動の概要
  - 第三章 レスキュー活動とその環境整備
  - 第四章 付録

川崎市市民ミュージアムは、令和元(2019)年に発生した台風19号により地下階に収蔵されていた収蔵品に多大な被害を被った。本冊は被災状況と令和5(2023)年度末までのレスキュー活動をまとめたものである。

第一章「被災の概要」では、施設への浸水状況がまとめられている。ここで初めて知ったのは、多摩川氾濫による浸水ではなく、高水位となった多摩川への排水量が減ったことで起こったマンホールからの内水氾濫が原因と考えられていることである。各自治体がハザードマップを作成しているが、河川の氾濫とは別に内水氾濫に関しても想定される被害区域が示されているので確認しておきたい。

第二章「レスキュー活動の概要」では、美術館部門、博物館部門における応急処置および修復処置について、事例を挙げ作業の概要が紹介されている。個々の事例を読むことで具体的な作業工程や方策を知ることができ、応急処置から修復処置への流れを見ることができ、被災時に何を検討し決めていかなければいけないのかを掴むことができる。なお、川崎市では、被災翌年の令和2(2020)年3月に「被災収蔵品に係る修復等の判断基準」を作成し、収蔵品のレスキューはこの判断基準に基づき現在も行われている。専門家による本格的な修復処置を必要とするものについては、川崎市と学芸員による会議において優先順位や修復方針の決定、修復機関の選定がなされる。

第三章「レスキュー活動とその環境整備」は、レスキュー活動の周辺について書かれているが、この「周辺」のことが実はかなり重要であり時間が割かれることがわかる。ひとつには、マニュアル作成やデータ保存環境の整備、支援団体の管理といった事務的なこと、もうひとつは作業員の健康を守りつつ作業効率を上げるための環境整備である。定期的な館内の環境調査、作業場所のゾーニング、環境に適した装備の着用の重要性を再認識させられた。根拠に基づいて作業員の安全を確保し最適化を図ることが大事である。発災初期よりスムーズにガイドラインを定めることは難しいが、この川崎での事例を参考にし準備できることもあるのではないだろうか。

<参考>川崎市市民ミュージアム HP(「収蔵品レスキュー」のページ参照)

<https://www.kawasaki-museum.jp/>

(資料保存委員会委員 川原淳子)

## 資料保存委員会の動き

2026年1月例会

日時:2026年1月21日(水)

出席:10名(うちオンライン9名)

見学会詳細確認,候補/ネットワーク資料保存141号刊行報告,142号進捗状況,143号予定/委員会新HPについて/全国図書館大会石川大会について/検討課題について(動画)

2026年2月例会

日時:2026年2月18日(水)

出席:11名(うちオンライン6名)

内容:セミナー企画案検討/見学会候補検討/ネットワーク資料保存142号進捗報告,143号内容案検討/委員会新HPについて/全国図書館大会石川大会分科会詳細検討/検討課題について(動画、パネル)

2026年3月例会

日時:2026年3月18日(水)

出席:11名(うちオンライン7名)

内容:セミナー企画案検討/見学会候補検討/ネットワーク資料保存142号進捗報告,143号以降内容案検討/委員会新HPについて/全国図書館大会石川大会分科会詳細検討/検討課題について(動画、パネル)

## 研修講師派遣実績

・2026年1月14日(水)

京都府立京都学・歴彩館(鞭馬)

・2026年1月16日(金)

練馬区立関町図書館 修理の基本(眞野)

・2026年1月22日(木)

北海道日高管内市町村立図書館等職員基本研修(田崎)

・2026年2月22日(日)

日本データベース開発株式会社@豊島区(鞭馬)

## editor's desk

今号はいつになく大部となりました。いかがでしたでしょうか。

川崎市市民ミュージアムの被災からもう6年以上がたちました。復旧活動は今も続けられ、その発信も行っておられます。今回の報告で、あらためて災害規模の大きさ、「内水氾濫」の恐ろしさを感じます。読者の皆様には、本稿だけでなく18ページにも掲載した『水害と博物館』も是非お読みいただきたいと思います。

映面上映会「映画『疎開した40万冊の図書』」上映会+談話は、戦後80年に何かできないか、ということからはじまった企画です。談話の最後に「図書館員の根底にある大きな仕事のひとつに、「平和を守る」ということがあるのではないのでしょうか」とあります。大きな使命として心に留めておきたいことです。

資料保存委員会ではこういったセミナー、見学会の企画、本誌「ネットワーク資料保存」や資料保存に関する書籍の刊行などの活動を行っています。ホームページ(日本図書館協会)では最近動画の公開も始めました。活動に関心のある方は是非ご連絡ください。「ネットワーク資料保存」への寄稿もお待ちしております。(み)

---

ネットワーク資料保存 第142号 2026年3月

編集・発行:日本図書館協会 資料保存委員会  
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14  
電話 03-3523-0816 FAX 03-3523-0841  
URL <https://www.jla.or.jp/committees/hozon/>

文章・写真の無断転載はお断りいたします。

---